

明鳥後正夢
四編
中

^ 13

2909

14

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

門へ 13
2909
巻 14

浦里明為後正夢卷之十一

江戸

南仙笑楚満及
瀧亭鯉丈 合作

第十九回

爰に又彼浦里の千葉家より二見十左エの屋敷
にありけり。鬼角目にも風俗にりて
果へきにあつた。一旦花形村の卒治が方へ
密の轎と雇ひ送りんとす。浦里の

昭和九年七月二日 購

願ひるまづの序木下川の業師へ糸指せんき。
 駕籠と急めまゝ田甫の一筋道向ふも。
 酔人の並歩て二三人浪々まゝまゝ。
 轎に突當りまゝは轎の棒鼻と入。
 ヤイ眼玉とちり因いて通るゝあつアゼ私ぐま。
 むらふ轎の棒サ突當えど。
 筒がえん後ぞく。
 暑いで道と急いゆあつし目もくらんで。

牛太「アニの分ちやア了多のらる後ぞく」
 兄アアやうけんさるまゝぞく。
 今この痛さで眼玉の
 飛ちしよぶが落ちやう後ぞく。
 今一人の勘太の男
 今この痛さで眼玉の
 浪言らる。
 草芥のあつとよく見てく。

お波なみや 波音なみのねのさかめおのりかき
よびにわたりおのりかき

きんぎょ 今いまのめい付つけよ 波音なみのね「ナニとせよ 烟けむりく

おのりかき 波音なみのねのさかめおのりかき
よびにわたりおのりかき

とておのりかき 母ははよきよめおのりかき 八幡はつぱんがわの

九つがおのりかき 金時屋きんときやさるがてい

遅おそい。もう時ときづえづづ 波音なみのね「ホニちちさるま

時分ときぶんとすだ。アノ長ながえの今日けふらヤおのりかき

ぬの子ぬのこ。おのりの夏なつに付つけてさるくと断たまもあ

人ひとでもあげようさるんと 波音なみのねのさかめおのりかき

長ながあつちけさる 波音なみのね「マ長五郎ながごろうさるよ

ア子こが時ときとて人ひとでも上げようさるま

おのりかき 波音なみのね「もえけ間まちさる

お前まへよさる 波音なみのね「マサるま

とあつちけさる 波音なみのね「暑あつい水みづと一ひとおのりかき

マヤくさる 波音なみのね「茶ちやが今いまにさる 長なが「水みづが

おのりかき 波音なみのね「ホニちちさる

おのりかき

六

「アイまじいぶんお達者でございりますませ」^長「うんうん

アアッアッアアお玉さんと」^波「そはくちんくちんく

うまのお中へんにうら山へいっせいでございります」^長「そ

とよ付ても菅家の一抽尋ねて工夫が肝心な間

ちよと嘯と客へイヨクア胸悪の番頭全六あよ

ちよと嘯と客へイヨクア胸悪の番頭全六あよ

「アイそはくちんくちんく」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

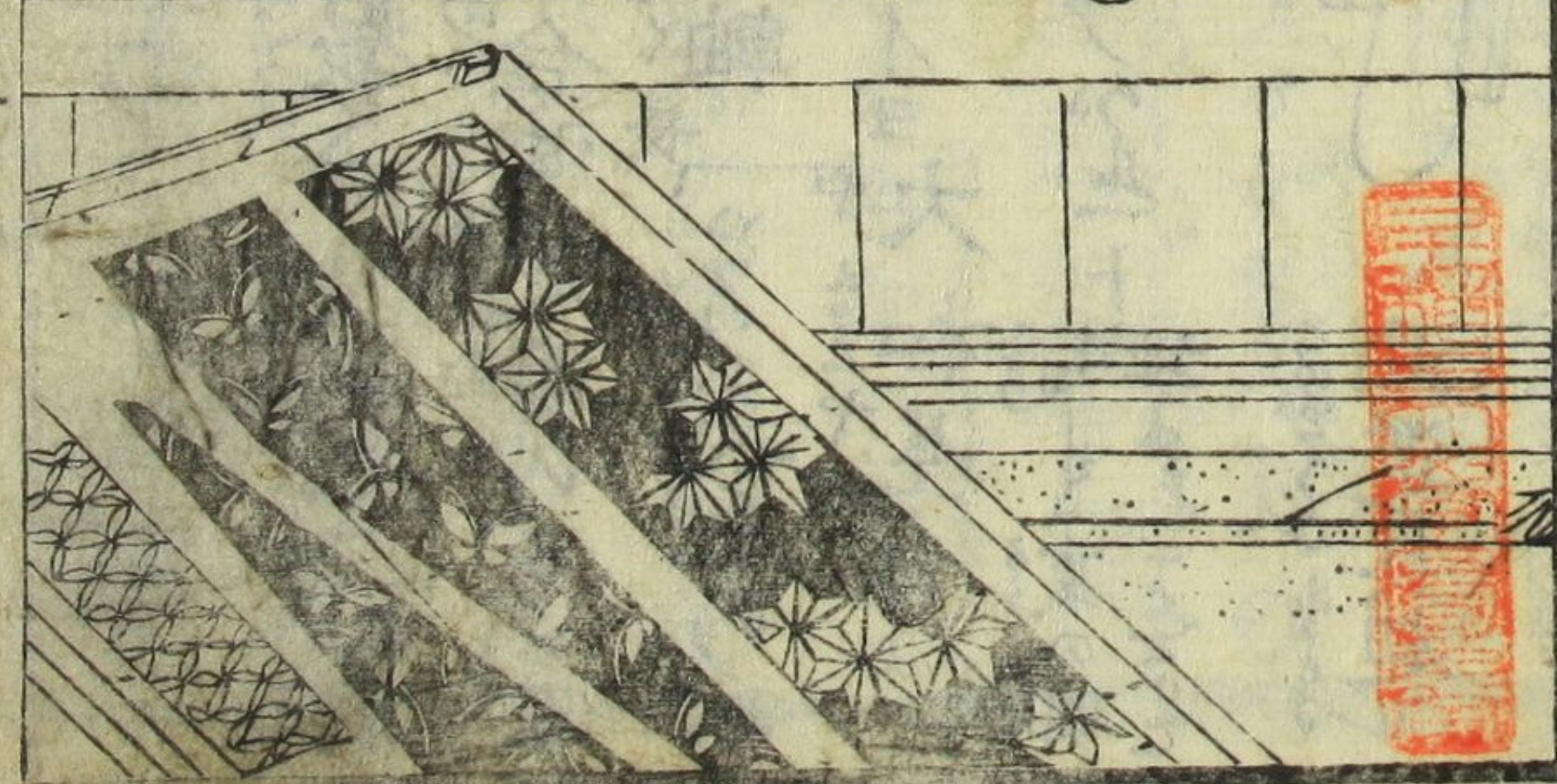
お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん

お言合。私もございります」^波「お玉さん



おのれが十一

金六
浪吉を子
うらふ

浪吉

清次

吸て全六 全一
「そまじでさうなりよめい。その若い男
様もさあ」

とりか内方のうへの蝶五郎。スリヤ時次郎め

もこの辺で。あやううんで居よめも志まぬに

けあのごううお玉めがめでさくといく。且ハ波吉が

そごう。どふも合点が行ぬと思ふ。さうと春

日屋の全六とあつてあえ。アノ蝶五郎めがさく

金流りの菅家の一軸うまくと。あつちく巻

あひふといふユゑあごんぐ。コリヤあいつらが計

畧の裏といんで嘘物。こつとつとつとつと

に時次郎が在家とさうまよる手ぐも。えん

まると時次郎めと室のさうそくは落し。あつ

かごづけてあまへバは方の寐さめが安い。その

上にてあつ。測右エツが手より詮髪仕出せ。と

披露して一軸とか上へさく。上まへ立身出せ

あつろのま。全一。その時こそさく。さく。めも。さく

づめ春日屋の若い。お照ハ女房お玉ハ妻

あつろのま

全一



めいご橋
 全六
 命を
 おとし

あま
 ちもそん時^まにやア^まに^まうびの^まおまを^ま分^ま

と^全「^まう^まにも^まう^まあり^まお^ま糞^ま器^まの^ま蓋^ま」^判あけ^まて

し^まはぬ^ま蜜^ま亥^まの^まさ^まま^まぐ^ま 全「^ま本^ま讀^ま通^まり^まま^ま

を^まわ^まと^まお^まさ^ままり^まさ^まさ^まや^まこの^ま身^まの^まさ^まま^まひ。

筆^まう^まり^まう^まむ^まの^ま作^ま者^まの^ま全^ま六^ま」^判そ^まん^まち^まら

今^まう^まら^まま^まこ^ま印^ま地^まへ^まり^まこ^ま先^まで^まり^まか^まう^まく^まと^ま叫^ま

ら^まみ^まは^まき^ま二^ま人^まの^ま合^ま浦^ま樓^まへ^まと

ら^まん^まだ^ま行^まわ^まく。

江戸と姿と隠せし。我等が工と見せし。
 合浦屋のお玉と。二世と。
 せし。女房と。お波と。合せ。
 一袖と。其うく。
 又その品も。吹入の。偽りの。荒川全六。
 実の宝の。懐中。
 金「イヤ。後入。
 たら。百兩の金と。
 江戸て先へ。篠塚と。言あ。
 者への。全六。今日まで。
 七此世に。迷。
 夢う。姿あ。出。
 のの。正真正銘。
 我等が。工の。建。河。
 其時。店者の。十。
 其。夏。

江戸と姿と隠せし

十

ちつと腕うでに覺おぼへの残ざん七う年としとらうて前生ぜんせいの
 かつ玉たまの仇あだとあつと討う古今ここんとあつと敵たかうも
 ううその又また うけてえろ 金かね一いちさふぬうやア返けう
 討うお玉たまが情人いらいとりふうへ恋こひのいもある死しごこ
 るいめ時とき次郎じらうが有家ありもうぬが知してゑるふ早はやく
 ぬうしてまきやアぐま 一いちさふよつひまうアその一軸ひとしやくと
 懐なつか手てと扱あうのどあまらうひ荒川あらか全六ぜんろく左右さゆう
 らんでまきくと切きこむ刀やいばふらうて飛とまきう此方こなた

もむぬ抜ぬたまう。とうくたまう。と切結きりむすぶ折あうら
 欠かむる蝶てう五郎ごらう白しろ奴やつの音ねにのいよる心こころなりま
 韋駄いごた天てんをう。そまうと見るより測はか右エみぎの儀ぎ七と
 ままうとあつ合あひ戦せんらうらにげて行ゆいづく道みちのと
 蝶てう五郎ごらうあつとあつて行ゆあまらうとも儀ぎ七と全ぜん
 六むが爰こゝとせんぞ切きむまぶ折あうら又またの雲くもよ今いま。
 月つきにあつらうも入いりまはる。まひにさうらめうて打うち
 あり合あひ石いしに落おちまづ思おもひまはる。全六ぜんろくが

あのかみ

十一

へ茶店ちやみせに立たけ。葎よ青ぎの影かげよりあうめうす。
刀やいばにさうさつらぬら。玉たまさう一ひとまのあひまが
うまひで切きらぬら。入いらぬら。寄よらうの曲まが者ものの
小こうげよう。あうらぬら。出でて全ぜん六ろくが死し骸がいの懐なつか中ちゆうさう
あてらう。油あぶらとあうらぬら。我わがらうらう。あう
うとあうめ枝えだ豆まめさう。豆まめ行いらう。向むかう荒あ川はら見み失しひ
て取とて返へせ。蝶てう五ご郎らう。さうとあうらぬら。縁ゆかりがまう。違ちがひ
来きらう。思おもひまじはき。當あらう。長ながヤア儀ぎ七しちさう。後あと蝶てう

五郎ごらうどらう。よんあう。全ぜん六ろくと手てにうけらう。甲か
斐ひもるの室むろのまらうが懐なつか中ちゆうに。長ながらうのらう。
あう荒あ川はらが野の持ぢと行いらう。跡あとあう。ひて今いま一ひと詮せん
あう。さう。やとらう。け出でま折おらう。

八幡やまはたかひ

ボクシ

浦里うら 明鳥あきどり 後正あとただ 巻まき二に十一じゅういち

二に十一じゅういち 十一じゅういち

